

前回到引き続き「わかる／わかる」について見ていきたい。  
十号で、次のように述べられている。

にちへに月日の心をもうにわ  
をくの人のむねのうちをば (十号 57)

この心どふしたならばわかるやら  
どふどはやくにこれをわきたい (十号 58)

せかいぢうしんぢつよりもむねのうち  
わかりたならば月日たのしみ (十号 59)

それからハ一れつなるのむねのうち  
わかりたならば月日それより (十号 60)

だんへににちへ心いきめかけ  
よふきづくめをみなにをしへて (十号 61)

せかいぢうをふくの人のむねのうち  
みなすました事であるなら (十号 62)

それよりも月日の心いきみで  
どんな事でもみなをしゑるで (十号 63)

多くの解釈本では、「わかる／わかる」ということと「すむ／すます」ということとを関連づけて捉えている。たとえば、『おふでさき通解』では、

この「分かる」は「分ける」と語源は同じで、器の中に、泥水を入れてしばらく放っておくと、泥と水とが分離して、下に泥がたまる、上には上澄みの澄んだ水が残る、という現象がありますが、これが「分ける」とか「分かる」という言葉の背後にある物理的な現象らしいのです。つまり、混沌としたものがはっきり区別できるようになることが、「分かる」とか「分ける」の元々の意味なのです。従って、「分ける」「分かる」と、「澄む」とは、非常に深く関わり合っている概念だということとなります。(15頁)

と述べられている。こうした「わかる／わかる」と「すむ／すます」とを関連づける解釈の典拠の一つが、十号のこの箇所であろう。

58の「この心」はいくつかの意味で捉えられ得る。まず、それは57の「月日の心」であり、それが「わかる」。もう一つは、「この心＝人間の心（をくの人のむねのうち）」が、「月日の心」「を」「分かる」というパターンで、「理解する」という意味合いのときに登場する、自動詞が通常はとらない目的語をとる場合である。前者の「月日の心」が自動詞的に「わかる」というのは、その心が判然とする様が人間の視点から描かれている表現である。後者の「月日の心」「を」「わかる」というのは、「を」があるぶん「わかる」が他動詞「わかる」に近づいて、その働きに関して人間の能動性のニュアンスが付加されている表現ではあるが、人間にとって「月日の心」が「わかる」という事態そのものは前者と同様であるといえよう。いずれにしても、自動詞的な「わかる」の発生に関して、「どうしたならば」と問いかけている。

その上で、58の下で「これを」「わきたい」と表現されている。ここでの「これ」が上の句の「この心」として、それが「月日の心」であるなら、この下の句では「月日の心」を「わきたい」と歌っていることになる。『おふでさきを学習する』では、こちらの意味にとって、「わきたい」とは、つまり「わからせたい」の意であると説明している(314頁)。他方で、それが「人間の心」であるなら、「人間の心」を「わきたい」ということになる。『おふでさき通訳』ではこちらの解釈をとって、58を「この〈人々の〉心がどうしたならばわかるであろうか、どうか早くこれをわきたい」と訳している(389頁)。「わかる／わかる」という対が、「月日の心／人間の心」という対と相まって、意味

を増幅させているといえよう。しかし、いずれにしても、「わかる」という親神の積極性をここでは示していることは明白である。

そして続く59・60では、両者ともに上の句の最後の「むねのうち」、下の句の冒頭の「わかりたならば」「月日」という語句が配置されており、類似型となっている。59では「世界中」と「胸の内」が区切れているので、その「胸の内」が神の心を指すのか、人間の心を指すのか明瞭ではないが、他方で、60では「一れつなるの胸の内」と、その「胸の内」が人間の心であることが示されている。しかし、いずれにしても、「胸の内」と「分かりたならば」とは区切れているので、「分かる」のが神の心なのか人間の心なのかは判然としない。むしろ、この箇所は、「分かりたならば」という条件文を強調しているように思われる。すなわち、「わかる」ということの主体や目的はさておき、58の上の句で自動詞的な「わかる」の発生を問題にし、下の句で「わきたい」と他動詞的な表現で積極性を示し、さらに58・59で自動詞的な「わかる」が発生した「ならば」（「わかりたならば」と条件文で示している）のである。そして、その条件の帰結は、「月日たのしみ」であり、次の61の「だんだんと日々心を勇めかけて、陽気づくめを皆に教える」ということである。

そして留意すべきことは、こうした意味の増幅をとまなう57から61の一連の歌を、続く62・63の二首ですっきりと言い換えているということである。62の「をふくの人のむねのうち」は、57の「をくの人のむねのうち」を受けて、それを「すました事であるなら」と条件文で記し、さらに59・60の「月日」を受けて、63の上の句で「月日の心」が勇みでてと歌い、61の「みなにおしへて」を受けて、63の下で「どんな事でもみなをしゑるで」とまとめている。こうして「月日の心／人間の心」を「わかる／わかる」というのは、「人のむねのうち」を「澄ます」として捉えられていることがわかる。

このことは、端的には、六号15や十号102に示されている。

にちへにすむしわかりしむねのうち  
せゑぢんしたいみへてくるぞや (六号 15)

心よりしんぢつハかりすみきりて  
とんな事でもをやにもたれる (十号 102)

これらの歌はともに「わかる」が「澄む」と並列に説かれており、そうした人間の心の働きが「成人」として表現され、また、「親（神）にもたれる」として論議されている。

十一号の次の箇所は、「わかる」が頻出する。

みのうちにさハリついてもめへへの  
心それへみなわかるでな (十一号 4)

しんぢつにをもう心とめゑへの  
しやんばかりをふもいゝるとを (十一号 5)

月日にハどのよな心いるものも  
このたびしかとわけてみせるで (十一号 6)

どのよふな心もしかとみているで  
月日このたびみなわかるでな (十一号 7)

口さきのついしよばかりハいらんもの  
心のまこと月日みている (十一号 8)

4で「各々の心」を「わかる」。5で「しんじつに思う心」と「各々の思案ばかり思っている心」とを「わかる」。7で「どのよふな心もしっかりみている」と断って、「みな」「わかる」。これは五号6や十三号40の「善とあく」を「わかる」という働きに通じるものであろう。「身の内」に何か「障り」がついたとしても、それによって人間の心を「わかる」のであり、口先の追従ではなく、「心のまこと」を親神は望まれていることが示されている。